

日本語における英語の類義的借用語の研究

エヴァ クラッソフスカ

はじめに外来語は、よくカタカナ語とも呼ばれる。欧米の言語から日本語のなかに入ってきた言葉で、カタカナで書かれる言葉である。現代の日本語では、外来語はかなり広範囲に使われている。分野によって違うが、一般的に、服飾、料理、スポーツ等で、近代に欧米の生活を日本に取り入れた分野では、多い。外来語の80%以上は英語から日本語に入ってきたものであるらしい。つまり外来語の大多数は英語系であることである。

(1) カタカナ語としての外来語と外国語

外来語は、外国語の単語がそっくりそのまま日本語のなかで使われているものではない。それはいわば、日本語化した言葉なのである。どうしてかという発音やアクセントや文法的な使い方が違ってきて、よく意味まで変わってくるからである。例えば、外来語に「ビルディング」という言葉がある。英語の building から来ていることは疑いない。しかし、日本人が「ビルディング」と言っているものと building、という英語の単語とかなり違う。「ビルディング」というのは、高層建築で、例えば都会にある大きな建築である。英語の building は、外来語の「ビルディング」も指すけれども、それだけでなく、もっと小さな建物のことも指す。共通点は「建物」という意味はあるにしても外来語では西欧風高層建築を指すのに対し、英語ではもっと広く house or other stationary structure with walls and roof, 「建物一般」を指す。

そこで場合によっては混乱が生じることがある。日本語のなかに入ってきた英語つまり外来語は、もとの英語英とかなり違ってることが多い。同じ表現が使われていても、英語と日本語では「指す物」が違うことがある。日本語で「パンツ」と言えば下着のパンツを指すが、英語で（特にアメリカ英語）pants と言えば「ズボン」の意味になるのが普通である。又、「ランチ」は外来語でそれに当たる英語は lunch である。その意味に相違があって、「ランチ」は洋風定食であり、朝食でも昼食でも夕食でも、レストランで食べることができる。しかし「ランチ」と注文したら、それはその食堂で定めた盛り付けのものを食べるとになる。英語では料理の種類ではない。朝食とそれの間の昼食 midday meal という言葉を当てるのが適当であろう。だから料理の種類ではなくて、例えば breakfast や supper に対するものである。

(2)

だからもう一度強調したいのは、カタカナ語のように外国語から入った語「借用語あるいは外来語」は借用されたそのときから原語ではなくなるのである。カタカナ書きされた瞬間から日本語と考えるべきだと思う。カタカナの影響で（カタカナのためだとも言えるかもしれない）新しく入った外国語の発音は（先に述べたように）もとの発音と違って来る場合が多い。例えば、英語の fan という単語は日本語のなかに入ったときに「ファン」と書き、[Fuan] 又 [Fuwan] のように発音されたい。言われた英語のネイティブ・スピーカーは意味が分からないと思う。現在、その単語は「ファン」のように書かれることが多く、発音も [Fan] と言われることが一般的になってきたけれども、決して英語の発音と同じになったというわけではない。どうしてかというと、日本語の [F] は両唇音であるが、英語の [f] は唇歯音だからである。

そして、発音だけではなく、よく日本語のなかに入ると同時に外国語の意味も違って来る。英語で juice という、果物などからしぼったままの 100% の果汁だけの意味であって、日本語の「ジュース」みたいにソーダや砂糖を加えた飲み物は、英語では違う単語を使って soft drink という。

時々意味のずれが大きくて外来語は全然違うものを指すようになる。日本語で「バイク」といったら motorcycle の意味になるけれども、もとの英語のというのは bike のことを指す。

又、日本人は「女の友達」のことを my girl friend、「男の友達」のことを my boy friend といって人に紹介するが、英語の使い方では、「ただの友達」を a friend of mine といい、「婚約に近い」関係の場合の女性に限り my girl friend、又、同じ関係場合の男性に限り my boy friend という。

英語の talent は才能、才能のある人を言う。しかし、日本では、テレビやラジオによく出演する人を「タレント」という。英語では、テレビ等によく出る有名人は personality, celebrity とも言う。

日本人は学生が授業を抜け出すこと、あるいは授業をサボり欠席することを「エスケープする」というが、正しい英語では cut を使い「I cut English class this morning」という。英語の escape は、「The lion escaped from the zoo」又、「The man escaped from the prison」のように使う。

(2) 外来語借用の意義

一体、どうして外来語は日本語のなかで必要であるかと考えると次のような答えが出てくる。外国語が借用語として、ある原語に入ってくる原因は：

(1) その原語に從來なかった新しいもの、例えば新しい機械類、外国の衣食住に関するもの、新しい制度や考え方などの名称が必要となる場合

(2) 専門語が必要となる場合

(3) 国際語が必要となる場合

(4) 該当する言葉は從來もあったが、外来語を用いることによって、なにか新しい意味やニューアンスが加えられる場合英語の借用語では、(4)の外来語を用いることによって、なにか新しい意味やニューアンスが加えられる場合は、次のように分けられる：

(a) 西欧的発想に基づいた高級イメージを与える言葉が必要とされる場合

例えば、「夏期講習」の代りに「サマー・セミナー」

「事務員」の代りに「ビジネスマン」

「女子会社員」の代りに「O. L.」

(b) 若者が使う英語の借用語で「ナウイ」とか「トレンドィ」な感じが必要とされる場合

例えば、「ちょうど」か「たった」の代りに「ジャスト」

「魅力的な」の代りに「チャーミングな」

「女の子」の代りに「ガール」

(c) 日本のものと外国のものを区別が必要とされる場合

例えば、「旅館」と「ホテル」

「お風呂」と「バス」

「戸」と「ドア」

(d) 婉曲表現に外来語が使われる場合

例えば、「便所」の代りに「トイレ」

「好色文学」の代りに「ポルノ」

「胸」の代りに「バスト」

「接吻」の代りに「キッス」の方が使われる。

(4)

(3) 同義的日本語と外来語との意味領域

ここで、同意語（意味が少し違うので類義語と呼んだほうがいいではないか）についての出したアンケートの結果を紹介してみたい。

「御飯」と「ライス」という日本語の類儀的關係を示す単語がある。意味がほとんど同じで、「指す物」も同じだけれども、両者に微妙な差異がある。和食の際の主食は普通「御飯」である。しかし、日本のレストランで洋食を食べるときに、御飯がお皿に盛られて出てくれば、それはもう「御飯」ではなく、「ライス」と呼ばれる。「御飯を食べよう」とはいうが、「ライスを食べよう」とはいわない。なぜかというと、「御飯」には「食事」の意味もあるが、「ライス」にはない。それでアンケートの例文を見てみよう。

「彼は天ぷら定食の御飯を二杯食べた」 (和食の茶わんに盛られた御飯)

「このごろの東京の一流レストランでフランス料理を注文すると、ライスではなくパンが出てくるようになった。 (洋食のお皿のライスの代りにパン)

「おなかがすいたから、そろそろ御飯にしよう。」 (もう食事の時間だ)

「ドライブ」と「運転」

「ドライブ」は原則として「遊楽を目的とする自動車での遠乗り」を指し、そのほかの場合には「運転」を使う。「ドライブ」は遊びにどこかにいくという意味があって、「運転」は車を運転するという動作の意味がある。

「今度の週末に天気がよかったら、箱根までドライブに行かないか。

「私は運転が下手なので、事故はもう3回しました。」

「ゲスト」と「客」

ラジオやテレビのプログラムに常時出演するのではなく、一時的に招待されて出演する人を「ゲスト」という。「客」は、「ゲスト」と違って意味範囲が広く、「誰かの家を訪問する人」や「店で買い物をする人」等を指す。

「有名人はテレビのバングミにゲストとして出演することが多い。」

「このごろの日本の家は小さくなってしまって、客を泊められる所は少ない。」

「デパートの大売出しの日は、店が開くと同時に客が飛び込んでいく。」

「ツアー」と「旅行」

ツアーは、旅行会社が企画する、交通・宿泊等が含まれ値段が決まっている旅行、あるいは団体旅行の意味がある。旅行の方は、個人的な遠足という意味になる。

「彼はいつも夏休みに海外旅行に行く。」

「私はツアーのヨーロッパ旅行はしたくない、プライベートで行ってみたい。」

「スクール」と「学校」

小・中・高等の場合には「学校」としか言わない。義務の教育を与え、制服を必要とするのは「学校」である。それに対してプライベートで勉強できる塾みたいな感じがあるのは「スクール」という。

「お母さんは最近クッキング・スクールに通っている。」

「息子が全然泳げないからスイミング・スクールに出そうかと思った。」

「父は学校の先生をしています。」

「彼は毎日歩いて学校に行く。」

(又、自動車学校とドライビング・スクールとも言えるが、自動車スクールかドライビング・学校とは言わない。)

「ドア」と「戸」

日本語でカタカナ語で「ドア」と言えば、西洋式の戸のことになる。最近は欧米式の建築様式が普及してきたので、伝統的な戸と特別するために「ドア」というのが使われている。「戸」と「ドア」の一番大きな違い、すなわち弁別の特徴は「ドア」が開き戸であるのに対して「戸」は普通は引き戸を意味することである。

「お宅の玄関の戸はドアですか。」

「欧米ではドアは普通内側に開く。」

「日本では、雨戸、ガラス戸、よろい戸、障子、ふすま等いろいろな戸があります。」

(6)

「オープン」と「開く」

「開く」は一般的な言葉であるが、「オープン」は新しい店その他の開業・開店に限られている。

「日本の店のドアは自動的に開く。」

「今本通りに建築中のデパートは来月にオープンするそうだ。」

「シーズン」と「季節」

春夏秋冬は「季節」である。特定の物事がよく行なわれる時期は「季節」より「シーズン」の方が多く使われる。

「日本人の一番好む季節は多分春だろう。」

「野球のシーズンは4月から始まる。」

「日本では季節がちゃんと四つある。」

「アメリカで結婚のシーズンというと6月だそうだ。」

「ウインドー」と「窓」

「ウインドー」は店の飾り窓に限られ、他の場合は「窓」を使うのが普通である。

「年末が近づくと、どの商店もウインドーの飾りつけでいっぱい。」

「団地の窓は南向きに作られていることが多い。」

「レストラン」と「食堂」

両者は「食事処」を指すけれども、食堂のほうが庶民的、レストランの方が高級な感じがする。よくレストランは洋風の料理店の意味がある。広義で、中華料理の意味も含む。

「私は会社で御弁当ではなく、社員食堂で食べる。」

「朝からなにも食べていないから、一緒にレストランに行かないか。」

「お好焼きとイタリアンレストラン。どっちがいいの。」

「ブラック」と「黒い」

色の名前としては「黒」、「黒い」が普通である。しかし「ミルクもクリームも入れないコーヒー」の意味なら、「ブラック」としか使わない。

「あの犬は真っ黒だ。」

「フランスの女性は黒い服が好きだそうだ。」

「私はコーヒーをいつもブラックで飲む。」

「グレー」と「灰色」

ファッションでよく「グレー」を使う。それに対して、「灰色」は、自然の色になる。又、日本にはないから、目の色は「灰色」ではなく、「グレー」と言う。

「私はこのグレーのシャツが嫌いだ。」

「今日は空が灰色だね。」

「嵐のとき海が灰色になって怖い感じがする。」

「ナイフ」と「包丁」

一番大きい違いは、台所で料理を作るときに野菜などを切るのに使うのは「包丁」で又、その料理を食べるとき、フォークと一緒に使うものは「ナイフ」である。その他、「ナイフ」は西洋のもので「包丁」よりずいぶん小さい。「果物ナイフ」とは言えるが「果物ぼうちょう」とは言えない。「ケーキ・ナイフ」のようなカタカナ語の複合語に出てくるのは、やはり「ナイフ」である。

「ジャックナイフで木を削った。」

「バターにバターナイフを使ってください。」

「包丁を研がないと全然きかない。」

「ヘルシー」と「健康な」

「健康な」の方が意味が広い。健康にいい、体にいいということで、食べ物でも生活でも人でも「健康な」と言える。しかし、ヘルシーな人とは言えない。「ヘルシー」は食料品や料理だけに限られている。

「最近新鮮なヘルシー・サラダがポプラとローソンで売れるようになった。」

「彼はしっかり食べてたくさん寝てよく運動するので健康な人だね。」

「スポーツ・ドリンクはすべてがヘルシーな飲み物です。」

「ミルク」と「牛乳」

英語のmilkという一般的な意味に対して、「牛乳」は、漢字ならすぐ分かる、牛のmilkという意味しかない。だから、赤ちゃんにあげるのはミルクだけれども、その借用語が入る前は「赤ん坊に乳をあげる」というふうに言っていたそう。日本人が婉曲表現として借用語の「ミルク」を使うようになったのは、少し恥ずかしい言い方だったからかもしれない。「牛乳」は、箱か瓶に入れ、店で買えるものである。しかし、粉の状態のものは、やはり「ミルク」という。

「健康のために大人でも毎日牛乳を一杯飲むべきです。」

「彼女は赤ちゃんにおむつを取り替えてからミルクを飲ませた。」

「パンを一つと牛乳を一本を買って来て。」

「ツナ」と「まぐろ」

「ツナ」はサンドイッチやサラダに使うかんづめのものだけで、他の場合は「まぐろ」である。

「すしはやっぱりまぐろが一番だ。」

「肉が嫌いな人は、ツナのサンドイッチを食べればいい。」

「このごろ日本の近海ではまぐろがあまりとられなくなった。」

「フルーツ」と「果物」

「フルーツ」は、レストラン用語だと言えるかもしれない。果物パフェではなく、フルーツ・パフェと言う。又、「果物のゼリー」の代りにフルーツ・ゼリーしか使わない。メロンやプラムという昔外国から輸入された果物に対して「フルーツ」とは言えるが、みかんやびわ等は「フルーツ」とはあまり呼ばれない。日常生活では「果物」を使う方が多い。

「果物が食べたい。」

「この定食はフルーツ付きですか。」

「ケーキ」と「お菓子」

「ケーキ」というのは、以前「西洋菓子」と呼ばれたもので、西洋風のお菓子を指すが、「お菓子」の方は、和風、又、西洋風、その他全ての種類を含む。

「東京ではケーキを売る店ばかり増えて、まんじゅうとか大福などのお菓子を売る店はあまり目立たない。」

「このごろの子供がお菓子と言えば、大体ケーキのことと見てよい。」

「ホット」と「あつい」

喫茶店用語では「ホット」は西洋風の熱い飲み物、特に熱いコーヒーに使われる。他の場合は「熱い」か「暑い」を使う。又、「ホット」の方はテレビやラジオによく出てくる。「ホット・ライン」という番組のなかで「ホットなニュース」という言い方が出た。その「ホット」は、新しいまだ伝えられていない情報という意味になる。カタカナの複合語にもよく使われ、「ホット・ドッグ」や「ホット・プレート」等。

「ホットコーヒーを下さい。」

「寒いときは、熱い鍋料理が食べたくなる。」

「暑い日には食欲がなくなってしまう。」

「キー」と「鍵」

多くの場合に両方交代で使える。例えば、「家の鍵」や「家のキー」も言えるし、「車の鍵」や「車のキー」とも表現できる。しかし、それぞれの特殊な意味もある。日本語の「鍵」というのは英語の「lock」に当たるものであって、ドアだけではなく、窓などを閉めるものも「鍵」と言う。「キー」の方は普通ドアを開けたり閉めたりする道具のような形をしているものだけに限られている。又、ちょっと違う意味でコンピュータ用語で使われる。

「今日鍵を忘れてしまったので家に入れない。」

「風が強いから窓の鍵を閉めたほうがいい。」

「車のキーはどこにおいてあるかしら。」

「ワープロでプリントしたい時にどのキーを押せばいいですか。」

「シューズ」と「靴」

一般的語としては「靴」が普通。「靴」というもののなかに「シューズ」や「ハイヒール」等が含まれている。「シューズ」と言うと必ず運動靴という意味になる。スーツに履くものは絶対「靴」で、「シューズ」とは言えない。

「古いのが飽きちゃったから、新しい靴が買いたい。」

「スカートにシューズはあまりあわない。」

「テーブル」と「机」

普段は、ほとんど「テーブル」の方が使われている。新しい家に家具を揃えるときにたんすやベッドとやはり「テーブル」を買う。違う言葉で言うと「テーブル」は食卓である。「机」は必ず勉強のための（英語でdeskと言う）家具の意味になる。

「そのお皿をテーブルの上に置きなさい。」

「私の勉強机はいつも本でいっぱいです。」

(4) 日本語の中の外来語の位置

こういう用例を見ると、日本語のなかに外来語（英語の借用語）が思ったより多いと感じるかもしれない。実際にも、漢語（昔の中国語の借用語）を含めると、外来語は現在の日本語の語いのなかで60%近くになるという。日本語の構造がとても便利なので（外国語の動詞に「一する」、形容詞に「一な」、又、副詞に「一に」を付けるのは日本語化という）外来語がたくさん入ってくる。そして、どの生活の分野でも使われている。数が多いから、特に日本語の伝統を尊重する人は「日本語の乱れ」の原因になるという。それに対して、カタカナ英語のおかげで、日本語の語いは豊かになって新しいイメージを作るといふふうに思う人も（若者に限らず）たくさんいる。和語が外来語によって取って替わるという恐れはないと思う。新しい借用語が入ってくると同時に、古いものは違うニュアンスを持つようになるか、全然使われなくなるからである。

日本語には、三種類の文字があるので、和語・漢語、又、現在の借用語はよく区別できる。こういうふうに、日本人は全ての単語を混ぜながら、うまく使うことができる。だからこのことよりも、日本語のなかの混乱は、日本人が外来語をあまりにも早く取り入れたり、捨てたりするということによって起こると、私は思う。現在、情報が速くなった。外来語は、国際間コミュニケーションを助けて、和語よりも、世界から入ってくる情報の本当の意味を伝える。外国からのインフォメーションを、和語や漢語を使って日本語に訳すのだったら、時間もかかるし、意味がずれるという可能性もよくある。だから類義語が必要になるのではないかと思う。それは和風のものや洋風ものを区別する。「宿屋、旅館、ホテル」、「着物、ドレス」、「戸、ドア」、「手拭、タオル」等がなければ訳すのが難しい。

今、外来語のとても活発な借用の傾向についていけないのは、年配者である。若者が大体「死語」（老語）だとみなす単語を年配者はよく使う。「写真機」や「接吻」や「蓄音機」や「拡声器」等がいい例ではないだろうか。

(5) 結び

現在、どの言葉も変わっていくという傾向がある。言語の変化は避けられないと思う。世界中、どこでも、英語が影響を与えて、「国際言語」になりつつある。しかし日本語と日本人は特殊な例で、カタカナ英語を借りるだけでなく、自分で、英語のような感じがする単語や表現さえも作るようになった。このような和製英語の方が怖い。正しい借用語と混じってしまって、語いの混乱の原因になる。そのうえ、国際間コミュニケーションも難しくする。借用語の「意味のずれ」というのも恐ろしいことである。例えば、もとの英語の "wet" と日本語の「ウェットな」は意味が違う。しかし、意味のずれは多分誤用とは言えないだろう。単に、日本語の「ウェットな」は「乾いていない、濡れている」という意味よりも「感動的、感動しやすい」という意味のほうが強い。日本語の意味で、英語でしゃべるときに使うと、確かに通じないと思う。同じように、「ウェットな」の反対の意味がある単語は「ドライな」である。これにも英語では「感動しない、冷たい」という意味はない。

又、日本語の「サービス」も英語と違う。"service" に「無料」という意味はない。

もう一つ整理した方がいいと思うことがある。カタカナ英語によく気をつけてみると、同じ単語なのに、表記が違うということが分かる。「コンピューター」と「コンピュータ」、「エレベーター」と「エレベータ」、「デー」と「デイ」、「ドア」と「ドアー」、「ガール」と「ギャール」などが両方書かれている。この不規則も借用語の混乱の原因になる。

又、カタカナ英語に盛んな「省略」もこの混乱の原因の一つになるかもしれない。「エアコン」、「ワープロ」、「パソコン」等には、皆もう慣れてきたけれども、「レスカ」は（レモン・スカッシュ）の意味、「テルカ」は（テレホン・カード）の意味、又、「ハイカ」は（ハイウェイ・カード）の意味だということはあまりだれも知らないだろう。「マイコン」は microcomputer の意味か my computer の意味か日本人自分自身でも分からないのに、よく使う。

しかし、何とんでも、カタカナ英語は日本語のなかで大きな意味をもっている。

日本語と借用語の類義語も、日本語が、現代、情報化社会のなかで国際間コミュニケーションの役割をうまく果たすために、どうしても不可欠だと思う。

参考書

- 1) 石綿敏雄著「日本語のなかの外国語」1985年3月20日
- 2) 石綿敏雄著「外来語と英語の谷間」1983年9月10日
- 3) 樺島忠夫著「日本語はどう変わるか」1987年12月20日
- 4) 小島義郎著「日本語の意味 英語の意味」1988年8月10日
- 5) 三浦昭・マクグロイン花岡著「語い」1985年11月30日
- 6) 石野博史著「現代外来語考」1983年12月1日
- 7) 文化庁「外来語（ことばシリーズ4）」1986年3月17日
- 8) 米川明彦著「新語と流行語」1989年12月5日
- 9) 松本安弘 松本アイリン共著「和製英語正誤辞典」1988
- 10) テディー・水原+ランダムプレス「外来語正しい使い方面白ウンチク」
1989年2月10日